

と云はるの様なことである。

当の中央部は軒昂なる甚く示すため
勇はなる文字を多く使用した。

比島の捷子作我

沖島の天子作我

内庭の天子作我 (沖後我問は未ださることある)

と女子同にである。捷子は確かに国軍の天我

である。内庭の作我又天我であるのは明か

である。天子作我はあつたものがあるのか

にやに對しては「捷子の現に中央部」の「捷」

と「天子」には「天我」とあること、確かにあつた

天子の語呂のうしろも「謙」の一語の様に

解釈出来るに事なからう。

もし沖後の作我に關する限り「天我」の文字が

使はれずに「吐血作我」と女子文字が使はれたら

「吐血」の強要する。誠に勇はる文意に

あり多大の感銘を与える文字であるのか

津に葉を朱な文句である。攻め何れを問う

端的に云えは敵を倒すことによつて「印」の「血

」によつて作我(天我)の目的を達するところ

出来るかそんなる廻りくといふ事より「吐

血」とか「持天」とか「短刀直入に平エれた

方」現国軍としては有難いわけを「迷子」事は

なかつた事である。幸実 沖後我問沖後

軍は始終「あまた」を「運」して来た。

日時の誤り
7月1日?
3月1日?
大正

四月一日着任早約十日間と云ふものは軍の作戦
構想や部隊配備陣地敷備の研究と要地捜索
に於ける費したる概々要地の状況も察の階に
入らぬはなるらうか

今や軍勢的問題が解決するものはない
沖籠方面の米軍来攻は目録に迫つてゐる。

中央部や方面軍のせうに情勢を判断して
見ても信用するに難足らぬ

日本流に見れば比島決戦であり。沖籠決戦
とあり本土決戦とあり。物事にめぐまれば

米軍から見れば比島沖籠一本土は
全部つくるめて決戦地帯であり。比島
は前進陣地。沖籠は第一陣地。本土は

強固な複層陣地と考へてゐるに違ひない
日本流の今兵間隔は復讐の考へてゐる
ところなる

とすれば、我後問題の間と云ふ結論の
出て来に

さうで此処には何に依つて勝つのかと云ふ
一突の問題である。

本土決戦準備の余裕ある様に我々のも
なれば、血を強要するものもない

戦勢を一転させる大作戦を考へなければ
はなるまい。やけの我々はいけぬ

無以事一の我々の其はなるらうか
数字的成事のみを求めらるゝ。大本營

20

の諸君はさういふまじき事なせぬと云れらるるのたう
うか。首里城頭にとつて云へた。

碧海の東にも西にも都のついでに白い
波頭丈の見えること云へる。

ふと云へるの起る。やうばり船は長江

今までの船を作長は半分は輸送中に

便えなくする。半分の甲更にその三分一

は基礎の印のたる。今三分一は長江の問

にまして最後の十分の長江の目標上空

に到着して様子を投下すると中高のから

平多は怒りの命甲の計算は五分の法計

二十四分の長力か。ある出来たのの大体

今まではどうしたのか

輸送と女子隘路の。本土基礎のから直接

攻撃の出来る。これに全部の半数のまるく

ゆがる。この計を一行くと三分一基礎攻撃

三分一長江の問の攻撃。三分一は目標上空に

達し得る。様々命甲の計算は五分の法計

畏の至りである。特攻のするから二分一乃至

三分二は命甲出来る。とすれば今様の十分一

乃至九分二の敵に命中出来る事だ。

保有今様は二基様と破算すれば沖絶伝戦の

我勢が一戦のはなれ業も不の戦事にはない

とこの様に云へはしめだ。

24

特攻隊の問題は我後最も批判のある問題
ではあつたが、今やその我法は否か入せざるを得ない。

歩兵や工兵の銃剣や爆薬の事につけては
実業する我法は肯定されるならば

航空特攻は航空部隊の実業にもさうい
はないのである。

さう考へると「我法」になり、沖泡の勝戦
も「我法」ではあるまい。

下は此の構想とある表するぬ、我法にのくまれた。

九州に在ける陸海軍合同の航空兵艦演習
である。我法は長に頼つて九州お後を命ぜ

られた。勿論海軍の作戦に呼ぶとする航空協力
の條項も胸に秘めん。北島も場所を離陸した。

九州の陸海合同の航空兵艦演習には大平も
陸軍者の一層々はいの類見知りの陸海
航空首腦の共謀である。

演習は比島攻略後、米軍の南支那、上海附近
の沖泡、沖泡の何れにも来る場合を予想して
、航空の運用あり沖泡軍攻の母大なりとして
ある所謂「天予作我」である。

陸海軍共に甚だ上りである。内容的には
技術的術軍事の問題に終つて、我軍指導の
一環として所長を妨からば、つも研究した。

るべき事であつた。規模的には違子けりとも
成都攻め、馬車攻めの域を出てゐる。事
あつた。

私はまず大にこの船と船攻めの論を述べたが
先づこの見方は一軍共謀の如きこと見ても
其殺される事であつた。

藝術的な事についてその理念的な問題に
ついで大に見解上疑問のあつた。

大本營の攻めには攻め目標も

海軍航空部隊は

敵機部隊 輸送航行中船団

陸軍航空部隊は

輸送航行中船団 泊地船団

となることである。

この目標選定は今まで南東方面かう比島
に於ける本年上陸作戦の全部成功し日本側
の苦杯となせしめる根本問題に於ける格
殊に海軍側に船団攻撃を承認せしむるに
一大進歩があつた。

敵機部隊攻めは至難中の至難事である。
成功し難きは稀少にして爆撃機に陸保
する飛行機隊の価値がある。

船団攻めと古くは問題があつた。
これは飽くまで理想である。しかし船機部隊
の實情に親炙してゐる人の技術的策
にある。即ち現在の練艦や沖陸作戦に使用

艦砲射撃こそ何モ十寸砲。恐いわけは
なく連射の中ハ口徑の至大なる威力を以て
ある。火力は幾許あるならん。我艦一隻は七師団
分の火力である。

艦は艦は野山砲一あひ仕止る事は去るし
巡洋艦は百新洋裏の命中奇位は之
よりかはいつくり返る事は今迄の経験
確認してある事である。

この様な考え方からして第三十三年の
要望から改修目標に對して強く要求した
この案に同意して是れはアングロ・ニコバル
方面で活躍し今通信の校長として出立し
てゐる田中少将一人にあり。主艦軍の

神日法に於ける
三月十日 研
読者は三月十日
ナリである

伊藤

主任者は言もなない。及こや中央部のラ
キである連甲はその研究外の事なりと見え

ニハ又半句の及論も改修もなかつた。
演習の終ると私ハ「第一を考へ、野屋海軍
基地に飛ん、ウエー」攻撃の最中であつた。
よし海軍に頼まう。

第五艦隊隊長官宇垣中將に切々とこ
意見ある述べ、す預めし三
長官は黙つてまゐり、みられたる取扱に次の様
に「言らへた」

「かつた、すよそ海軍の仕度ハ敵の
海上武力を改修するにある。
心配するな」

その「言」は疑しく、と思はず、漢の益を以て其言

艦隊の指揮統御と女子問題ニシテ
實は當りたることあるに非ざるあり

指揮統御の段階、階級と女子軍は
用兵上極めて重要な事あり、故に統御

一、方面軍、軍、師団、旅団、各長、
その任務と地位に於ては、指揮の方法は

変つて来る。これは一、二の鉄則であり、且、
我軍や第一、旅団の教訓、ぬれぬことあり

艦隊の指揮は自ら中央艦隊長官として
米英の大規模な海軍機群に対し、ナゲル師団

の艦隊師団に自ら指揮し、邊境を早合し、
日本のモサ師団長は自ら命令して飛行機を

指揮し、陸上昇上せし指揮することあり

デンと腰を据えて指揮の段階、階級と女子軍
して指揮するのは、如く軍の事、ことあり

時に出発する目標、移動目標を改定する
艦隊、師団、海軍部隊は感入くむべし

結核、師団の指揮の大軍にあり
人軍のピラミットの必要も大いに加味せよ

航空軍や師団の統制と編制、
航空部隊の本質的な事を忘れし、又、航空軍

の司令官の指揮ぶりに魅力を感じず、航空軍
司令官の任務担当者、部隊を視望し、

初めしりする。華軍なる事には大いに志をこめて
ある。初めしりの方の本質的な問題に在りては
あまり研究したるなかつた。たゞし「開戦第一」
撃撃の方法は除いて。

殊に此の様な作戦段階に特殊な攻撃
法を採り用するの点から即ち攻撃部隊の
逐次なくなるべく行く場合如く指揮官的
指揮法はむしろ拙いと云ふの通りであ
らう。

今や地上軍、航空軍のこの様な考えは
到るに実現しようもない事である。

今まで研究研鑽して来た航空運用に因る
包圍も希望も実現する機会は今と云ふもの

淋しい限りであった。自分の能力。但し事も
知つてゐた。しかし誇りと自負心は失はな
なかつた。おんがましくも胸の中に入れん
我若し航空軍司令官なりせば

種々の問題はあつたにしても九州への出張
は一志。志義があつた様に思ふ。
中絶軍の希望を卒直に披瀝し得たから
である。

三月中旬米機初艦隊は本州九州中絶の
各母の場を東から順次に西南に亘つて
軒並みにしらみつぶしに爆撃してゐた。

地下百尺之心
これ以外に身をおく方法は無い。

三月二十日午後日航機雁の早瀬陸日没の
時頃には台せおめ坊に到着する様 瀬陸時刻
が現正とせらるる。敵機切部の妨害を避ける様
民は機も一志戦術的に走らせられた。
この山後の私の歩みは何れも
一瞬の危険にさらされしる。後かう考ると
肌は西木の生ずる。
この歩みは行も敵の妨害もなく 危険極
まるものかありた。

仕密雲の霧に上り下りある。一定時ある程は
基隆の傍の山は見えない。雲下にもぐる。
海上約一〇〇米行けども行けども台場につかぬ。
暗くなりはいめる。ふと不安を感じて
機従席に行つて見た。この機も二十分間の
機従記録を持つてある。中隊長もやつた
機従の強みもあつた。
お客は盲目で何も知らぬ。

機長 どうした
機の位置が合いません
方向探知機は
故障した
通信機は

故障しすし

何なる業々任なるの故、大なる東喜り命

を預つてゐる癖に、「いかれたわ」と思ふ

と昔に怒りし頭に及して事だ

か怒つたらふちこわした

目標捕獲た、何とこの

暗い海面に曳こ鍛はれた操従者の眼を

光らして、幸敵の態勢である。

右翼下に、網膜に土と「おのすめる、

眼をこする、」とるに白浪の躍つてゐる、

又見える。「澎湖島」直感する、

機長 今澎湖島上空に左へ九〇度

旋回、機長考案、風力と昔笑する。

機長は頼るものか、このが、女子かま、に操作する

問もなく、砂浜海岸に達する、更に九十度

左旋回である。淡水河と口にたどりつけば

なんとかなる、と考ふる。

海岸に大なる船の洋立ちしてゐる、これは

新竹の沖合の昔だ、もう樂なものがある。

淡水河を溯り、舟の場にスパーリー着陸した

よし一言「おのすめる、」

機長、操従士、通信士「す此だ、」

三人は集つた、私は何もさはたさかつた、三人は

はつてゐた、

「ゆける、負つて有難う、」

大なる客と乗せせる事と忘れん様

あつた。

これはつまりめと行くと、石川考澤と八草考澤のいかに合ひてあつた。

(徐州)
大見荘
永記

一方は大見荘の我功と航空部隊の運用とも
と考へ、第三工三軍に対し、盛に協力方を要求
するのには協同作戦にしろは一言も子れな。

方や陸大英才、米國駐在陸大教官の
好龍一、何と若僧かと考へてゐるらしい。

方面軍はこれを捕らへる方となる。

又従来、の航空部隊の大我果が、額面以下
であることも、算承知である。の、伊後どのや程

我果のあけられるものかと多量なとく、つてくる
裏にもある様だ。

か、いかに合ひても我果のほじまれば何とかなるさと
私は軽く考へてゐた。

後々になるつて考へて見ると私は軍人として

好運にめぐまれゐると痛感する。私が二十日

夕方台共を離陸したかつたらどうであつたか

と云ふ事である。

事實、伊後の運用は二十二日朝から艦砲射撃す

の始まつたのであつた。

当時の状況から考へれば、我功場に運ばず、行けなかつたに

如何に、昇解しても追いつく事はなかつたら、ソ

悪罵と批判の間に、武人として生まれるは、我れ

なかつた事と思ふ。

それによつて様な我略構想をなすにやばならぬと
信じこめる。

沖繩作戦準備から沖繩敗戦後 軍事評
論や批評はこの一頁に集まされてくる。
この評論は撒物な程であり、竟地づく
の様でもある。その批評の筆名の大半は
所で自分と忘れこめる。

伊江島守り場の守備に就いてある。
北中守り場よりモ伊江島の方の規模に
於いて遙かに雄大であり立地なものである。
僅かな守備隊と守り場大隊の長たむ
である。守り場守備乃至敵の使用場等と
女子立場を同じにする。北中守り場と同様に

論評するにあり此の島を中央部のまて
の通りに守備する場合には一個師団半の兵力
が必要であることは誰にも見當がつく。
この事については敢えて口をつぐんでゐるのは
中央部も方面軍も自この次第を相違して
ゐるとしか思えない。

沖繩から東京に帰つて瀬島君が第九師団
抽出を氣にしたのかどうか「あと一師団
増強してゐたらどうか」と思ふが
問ふて来た。私は答へた。

「面白作戦のお来たとは思ふがあの軍統帥は
僅か数週ありてあり歸郷は合いてあると
思ふ」と。その様な統帥ぶりでもあつた。

X X X

攻防と勇怯について

攻勢論者は勇者であり、防勢論者は

怯者といはるゝ

た。モロシンのモスクワ進撃に際して、露將クルー

の撤退したに総退却は義史上稀有の

大勇の氣の所産である。

戦場が苦しまされに、敵の圧迫に堪え兼ねて

攻勢(撃)に転移するといふは、これは

怯者の行状である。断ぜられども止むを得ない。

勇怯の判断は微妙であり、攻防の理由が

如何に完備し様ともそれには依つて判定するべき

ではなからう。

戦場の勇怯の判定のポイントは自己保全の感作から、敢するの否に在る。

神鏡の作戦主勢者が、教術的見解は

別として、^{終始} 航空部隊と海軍部隊の犠牲に

あり、^{終始} 軍力保全を圖つた事は事實

である。知性をほこり、軍の好經歷を

看板にしたところ、それを以て自分自身

を偽つたり、怯者のさしり、まぬがれる事は

出来なからう。

X X

日露戦争の勝因の最大の一つに大山大将と

兎玉大将の名コンビがある。俗に大山統帥が

あり、東洋流の統帥の精髄があるところ

「の信を腹中にあつた」の名統帥であつた。我史を編む者のひとしく感得し得る身訓であり軍に職を奉ずる者の憧憬するところであつた。但し大山、兒玉と女子個人的な条件と逆にな山の織細、兒玉の大腹と女子逆説的なる組合はせに氣の付いた者は少かつたうらう。

軍司令官も聯隊長も甚だしきは、大甲隊長近もの、大山、たうん、幸とのそんだ詰り次級者に実権の移つて来た。と女子の實情であらう。

又將官級の人達は時代的環境に大きく左右され、たうしく宗教的乃至思想的なる問題に力を入れた。

このたうの様である。大正の及軍的思潮の中、軍人生命の道と宗教や思想的な方向に向けた。あつたのは首肯出来る。及面、純軍事特に兵略兵術の問題を好く、目が見、科学的哲學的に思索する事、なかつた様に思はれる。最終の智識人は茅次大長にもとび、日露戦の智識の風靡してゐた。

私は常に考へてゐた。軍人の価値は兵場、勝つ能力を持つことにある。と。軍神とは思つても、乃木大佐は決して名將ではない。ジャグ、馬にあつても、独、フランスワ、や、ソ、ブートナ、の方面、名將と信じて、疑はない。シユリーエシンの、哲的、兵學、から、独逸、兵學